

スポーツの意義・価値について考える (2)

ースポーツ社会学における取組みー

出口順子*

1. はじめに

スポーツを取り巻く社会環境は時代と共に変化し、それに伴ってスポーツの在り様も変化してきた。同時にスポーツの担う役割も変化し、さらに現代では多様化している。このような時代背景を鑑みれば、スポーツに対して多様な価値観が存在することはいうまでもなく、それを踏まえた上でスポーツと関わるという姿勢が求められる。

本学スポーツ健康科学部では、保健体育教諭、スポーツ指導者、健康づくりリーダーなど、よりよい健康社会の構築に貢献する人材の育成を目指している。学校運動部活動の運用を巡る議論は保健体育教諭を目指す者にとっては身近で重要な事柄であるし、スポーツ指導者を目指す者にとっては、スポーツの本質の理解（スポーツ観の構築）は必要不可欠であろう。また、健康づくりリーダーを目指す者は、政策や地域スポーツについての知識が必要である。このようにスポーツと社会とのつながりを、目標とする立場を念頭に置きながら理解することは、それぞれ指導者としての立ち位置を明確にするものと考えられる。そこで本稿では、スポーツ社会学の授業を通して履修者が学び得たスポーツの意義・価値について、履修者自信のふりかえりを用いて報告する。

2. 授業概要

2-1. 授業の到達目標および内容

シラバスは出口（2016）¹⁾で報告した内容と同様であるが、以下に概略を述べる。授業概要は、「これまでスポーツは、単に身体運動としてのみ存在してきたわけではなく、社会を反映した文化として存在してきた。グローバル化が進む中で、スポーツも例外ではなく、国境を越える文化としてますます人々の関心を集めてきている。その一方で、スポーツがあまりにも身近なものであるために、分かっているつもりになっていることも多いのではないか。スポーツ社会学では、いったんスポーツを身体と切り離し、社会的な文脈と関連付けて捉えることによって、スポーツの抱える今日的な問題等を客観的に見、考えていくことを目的とする。」としている。到達目標を表1に示す。これらの到達目標を達成するために、「スポーツの本質」、「利用されるスポーツ」、「スポーツ政策」、「多様なスポーツ関与」と全体を4つに分け、授業を展開している。スポーツの本質では、スポーツの語源や歴史に言及しながら、スポーツの本質は「遊び」である点を強調している。利用されるスポーツでは、スポーツと社会の関わりにおいてスポーツが中立的なものであり続けることの困難さについて学修している。スポーツ政策では、これまでの日本におけるスポーツ振興施策やスポーツ推進体制の現状、障がい者スポーツの現状を理解した上で、スポーツ振興のあり方を考えている。最後に多様なスポーツ関与では、「する」「みる」「支える」スポーツの現状や、総合型地域スポーツクラブ、ジェンダーとスポーツ、環境問題とスポーツについて

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

考えながら、スポーツのさまざまな側面について目を向けている。すべての授業を通して、スポーツの意義・価値について受講者に働きかけ、自分自身で考えるよう促している。

表1 到達目標

- | |
|--|
| 1. スポーツ社会学のフレームワークを説明できる |
| 2. スポーツを様々な社会的事象と関連して考えることができる |
| 3. 現代社会におけるスポーツの意義について自分なりの考えを持ち、主張できる |

2-2. レポート課題

スポーツと社会との関わり方を考える練習として、7回のレポートを課した(表2)。第1週目では、スポーツの意義・価値について記述してもらった。これは授業を受けた前後でどのような学びがあったのか、最終授業においてふりかえりを行うことを目的として行った。第4週目終了後にプレイ論的スポーツ論の系譜について説明するレポートを課した。これはスポーツの本質は遊びであることを確認するためのレポートである。第8週目にスポーツ基本計画に示された目標を達成するための方策についてレポートしてもらった。身近なスポーツ環境が人々の生活や地域に与える影響を認識し、スポーツの意義を考えることを意図したものであった。第9週では、オリンピックムーブメントとドーピングに関して考えを尋ねた。スポーツの本質を再度確認するためのレポートであった。第12週では、スポーツ実施率に関して分析を行った。社会の中で、スポーツと「する」「みる」「支える」で関わっている人がどの程度いるのか、スポーツが社会の中でどの程度受容されているかを確認するためのものであった。第14週では第一週目と同様、スポーツの意義・価値について記述してもらった。第15週で、第1週目と第14週目に行ったスポーツの意義・価値に関するレポートを返却し、比較してどのような学びがあったのかをふりかえり、内容を記述してもらった。

表2 到達目標

- | | |
|-----|---------------------------|
| 1週 | スポーツの意義・価値について |
| 4週 | プレイ論的スポーツ論の系譜 |
| 8週 | スポーツ基本計画に示された目標を達成するための方策 |
| 9週 | オリンピックムーブメントとドーピング |
| 12週 | スポーツ実施率に関する分析 |
| 14週 | スポーツの意義・価値について |
| 15週 | 1週目と14週目の比較(ふりかえり) |

2-3. 履修者

スポーツ社会学は、2年次春学期配当の選択必修科目であり、また教職課程科目(教科に関する科目)である。さらに(公財)日本スポーツ協会スポーツリーダーの資格取得関連科目でもある。よって履修人数が毎年多くなることから、学籍番号によってAクラスとBクラスに分かれている。2017年度の履修者はAクラス146名、Bクラス129名であり、2年生のほぼ全員が履修している。

3. スポーツの意義・価値についての記述方法

2016年度の授業報告（出口、2016）では、初回の授業と授業終了後の定期テストにおいてスポーツの意義・価値について記入してもらい、教員が履修者の学びについて授業前後を比較するという方法で履修者の学び得たことについて報告した。2017年度は、履修者のふりかえりの視点から、履修者の授業後の変化について報告する。野外教育の分野では、冒険教育における学習過程としてアウトワード・バウンドプロセスモデル（星野・金子、2011、p.48）²⁾が知られている。それによれば、学習者は困難な課題設定に対し向き合い、課題解決をし、その体験をふりかえってその意味を理解して自己意識が向上したり、問題解決能力を習得したりするという。このように野外教育においてふりかえりは教育的価値の高い行為として捉えられている。今回の報告では、このふりかえりの視点を用いて履修者の学びについて報告したい。それによって教員の評価ではなく、履修者自身が感じている授業の効果を明らかにできるものとする。また、履修者自身にとっても自分自身の学びを実感し、その後のスポーツとの関わりに役立てることができるものと思われる。

4. スポーツ社会学を通じた学生の学び

履修者がスポーツ社会学の授業を通して学び得たスポーツの意義・価値について、授業前後でどのような変化があったのかをふりかえった記述には以下のようなものがみられた。

第1に、履修前は個人の経験からスポーツを捉えていたものが、履修後は社会との関わりで考えられるようになったという記述がみられた。例えば「第1回の時点では、スポーツはやっているプレイヤーとしての視点からしか見ることができなかったが、今は地域・社会に対して大きな影響を与えることができるものだと分かった。」や「自分に対する影響について考えていたものが、社会について考えるようになり、視野が広がった。」といったものである。出口（2016）において、個人の経験の範囲内の意義・価値から社会との関わりの中での意義・価値への着目がみられたことを報告したが、履修者自身も同様の学びを感じていることが分かった。このような個人の経験から社会とのつながりへの視点の転換は、多くの履修者が記述していた。履修者の中には、「もっと身近なことについて考えるようになった。スポーツの価値の中に、地域のつながりや障がい者スポーツなどがあり、自分たちに何ができるかということ学んだ。」といったように、さらに社会との関わりを自分のこととして捉えている者もいることが伺えた。

第2に、履修前には表面的あるいは曖昧な表現であったが、履修後には具体的・現実的になっているという記述がみられた。例えば「1回目のレポートの時は、人とのつながりの『人』はすごく大まかだったが、2回目のレポートは、障がいがある人、ない人、若い人、高齢者など、より具体的になっていた。」や「2つのレポートを比べて大きく違うところは、深く掘り下げてスポーツのことを考えているところだと思います。」という記述である。この内容は2016年度にもみられ（出口、2016）、2017年度も多くの履修者にみられた。

第3に、スポーツの負の側面に気づいたという記述があった。例えば「2020年東京オリンピックに向けて社会全体がスポーツを振興させていこうとしていることが分かった。しかしそれは決して良い事ばかりではなく、悪いことも含まれている。」や「社会におけるスポーツの在り方を批判的に、客観的に考えることができるようになった。」という記述である。「オリンピックやワールドカップの商業化についてイメージが変わり、疑問も出てきた。」という記述もみられた。さらに「1回目は良い所しか見えていなかったけれど、今は悪い所にも目を向けられるようになった。スポーツの良い所だけではなく悪い所にも目を向けることで、もっとスポーツをより良いものにできると思った。」と、批判的に捉える

ことがスポーツの振興につながると考える履修者もいた。前回の報告（出口、2016）では、スポーツ礼賛からスポーツの負の側面を踏まえた価値観の構築がみられたことを報告したが、今回のふりかえりの記述においても同様のことが報告されたといえる。

第4に、スポーツを多面的にみられるようになったという記述がみられた。例えば「スポーツの意義が自分から世界へと広がった。ただ言えることは1回目の文も2回目の文も書いた内容に間違いはないと思う。自分が知識を深めたことにより、考え方が変わったのではなく、スポーツを今まで見ていた角度とは違う角度から見るができるようになった。視野が広がることで考えも広がったのだと思う。」や「新たな観点からフェアプレーを考えることができた。」といった記述である。2016年度の授業報告では、関心・考えの深まりから自分自身の価値観が構築されたことを報告した（出口、2016）。2017年度は価値観の構築まではいかないものの、スポーツを多面的に捉えることができるようになったようである。

第5に、興味関心が広がったという記述がみられた。これまで知らなかった地域におけるスポーツや障がい者スポーツ等、身近なスポーツ環境におけるスポーツの現状を知り、興味を持ったようである。例えば「障がい者スポーツという場面において考えることは、第1回の時はできなかった。」と記述した履修者がいた。また、企業スポーツやスポーツの経済的側面に興味を持った履修者もいた。さらに、障がい者スポーツや地域スポーツに興味を持ったという履修者も多くみられた。

最後に、多くの履修者が知識の重要性について言及していた。授業を通して専門的な事柄やスポーツ社会学に関する知識を得たからこそ、上記のような学びにつながったと考えていた。例えば「1回目ではまだ知識が少なく、スポーツが与える影響を自分の思うことで書いていた。だが2回目では、スポーツ社会学を学んだことにより深い部分まで考え、具体的な事柄を出せるようになってきていると思う。」という記述がみられた。このように自分自身の知識が増えていることや知識を基に考えが深まっていることを報告する履修者が多くみられた。この点は前回の報告（出口、2016）ではなされておらず、履修者のふりかえりによって明らかになった事柄である。物事を深く考えるには根拠となる知識が必要であり、知識を増やしていくことも履修者の学びには重要な要素であることを再認識した。

5. 今後の授業に向けて

本稿では、スポーツ社会学の授業を通して学生が学び得たことについて、履修者のふりかえりの視点から報告することを目的とした。具体的には授業の初回と第14週目でスポーツの意義・価値について記述をしてもらい、第15週で両レポートを比較して自分の学びについてふりかえりを行うという方法を用いた。

スポーツ社会学の授業を通して履修者が実感した学びには以下のようなものがあると考えられた。1) 社会の中のスポーツという認識 2) 具体的な事柄に対する意見の構築 3) スポーツの負の側面への気づき 4) スポーツの多面性 5) 興味・関心の広がり 6) 知識の重要性 である。これを踏まえて今後の授業の展望を最後に示したい。授業前の予習として知識の修得を意図とした課題を課す。授業内で出てくる専門用語等を授業前に学修しておく。授業では知識を結びつけて考えられるよう、事例を多く示しながら授業展開を行う。その上でグループディスカッション等を行い、他の人の考えも聞く中で、自分自身の考えを多次元化していくよう促す。復習として、授業のふりかえりを行い、予習および授業を通して何を考えたのかを内省してもらい、レポートとして残す。毎回のレポートを通じてどのような学びがあったのかを最後にもう一度ふりかえる。

次回の報告では、このようなプロセスの成果について報告したい。

参考文献

- 1) 出口順子 (2016) スポーツの意義・価値について考えるースポーツ社会学における取組みー. 東海学園大学教育研究紀要 (2), 84-87.
- 2) 星野敏男・金子和正監修 (2011) 野外教育入門シリーズ第1巻野外教育の理念と実践, 48, 杏林書院, 東京.